門
不
出
二、緣山
三中溪
清涼宝藏
へ 13
1626
3

1626
3

小夜嵐巻之四

第十六　園生樹の事

第十七　源の河原の事

第十八　源平の會合

第十九　降竜寺の事

第二十　飯沼採の事

緣山

小夜嵐巻第四

第十六　園生樹の事

ものくるの罪人ありひけるハ幾年月の怨霊なりけるとか八條しゐれ北獄くと申さん。是ハ御堂所親の行と
うりのよしハ未書のなりしくそ。兄弟ハ二ともに外
新類春屬いうし西玉文かうありてゆくうの黄愚とう
うちくに申さんなるづるまりくらいつをこそ。
愚愚の奇責のゆれえびてしてむかしくはうし
そうしいば夜ゆひのうちんかく初と物のうし
あのまうくうるべくしくしひ北獄くとまりの年
月ゆくうくうくみて遠遠又ワゴとむ北ごく

よわ深溝わりてうらこ承くあるゆゑゆりのせなる所もあり
名津川ぐくおがくるんわせだやし一百三十六ちくで
こ数ゝるあくたのわさこ守れハ業よ遠ざん延道ミ
人まあふハうれしき優曇花のむれのミこそなくて
ちしもし鄙顛けんぞくゆらわかりもしのくあうちひ
あくしちやむや見費孫売庵しても子主従夫婦と
こそりてこまかし翁媼ら老の友づきも家富づ
きぞわりくこれもなれく人なれとまハ散がさかもも
あくうあふさら要婆わくりわし和しさやハ後
行ふ末のうきてさやかて先だりものハあきそえ
あがりまよろ父取組く色まくし方の相続せ

がすむこれぢごくげんくうしこうく所と呼ば
いづちもわりハなりわきやしあるこなこしゆるふ
たゞふくぜん二人りわいらうちやむごく庭三ぞ
こ友達なりし。まけりさりく入り荒残いの月の津
もうたりてんとそ。山寺の手の所葉の跡逸ぞ。
そよくせけ地獄なしげてきめさりく花さくらま
の大蛇わわちごさかげよ二人立ちわ。思ひとをわりて古今
の事花流しやぞまの入りさ所あくちして。けふ日々と
らくやしりの人ごさる盤なかをしのひりて思ひ
心あく菓の冠よ物しのかそ。非おそろへ花あく
うつゝひけるうしろの山より咲きなりと春の花そ

さかぐらしてぞ花のちりかゝる神とそのまゝあまこがれ
まへぬぐくもあまたたゝきたちれよ花の雪八幡りう
つとひぞわゝ言ゆゝばいく度神ともゝへまで宮
じゝんとかゝひおさそていうゝろなかいたき変八
わたたりつまいゝ今ひとりもしがいとかゝやぐらあハ
わゝ〇ぐし紀貫くゝ泳よちゝゝちかまへ下風を
さむゝゝでとはどゝゝんぞゝ西り法師みゝゝのよ
ちふぐ花のちゝぬゝまゝく稼ゝ寄に
おのなかふ孫ともゝたぐ者聖
むれのひかんこゝとかかまん
ぬきあがゝゝゝゝわゝれあゝ
ありゝやたゝもゝん掘でぶふ

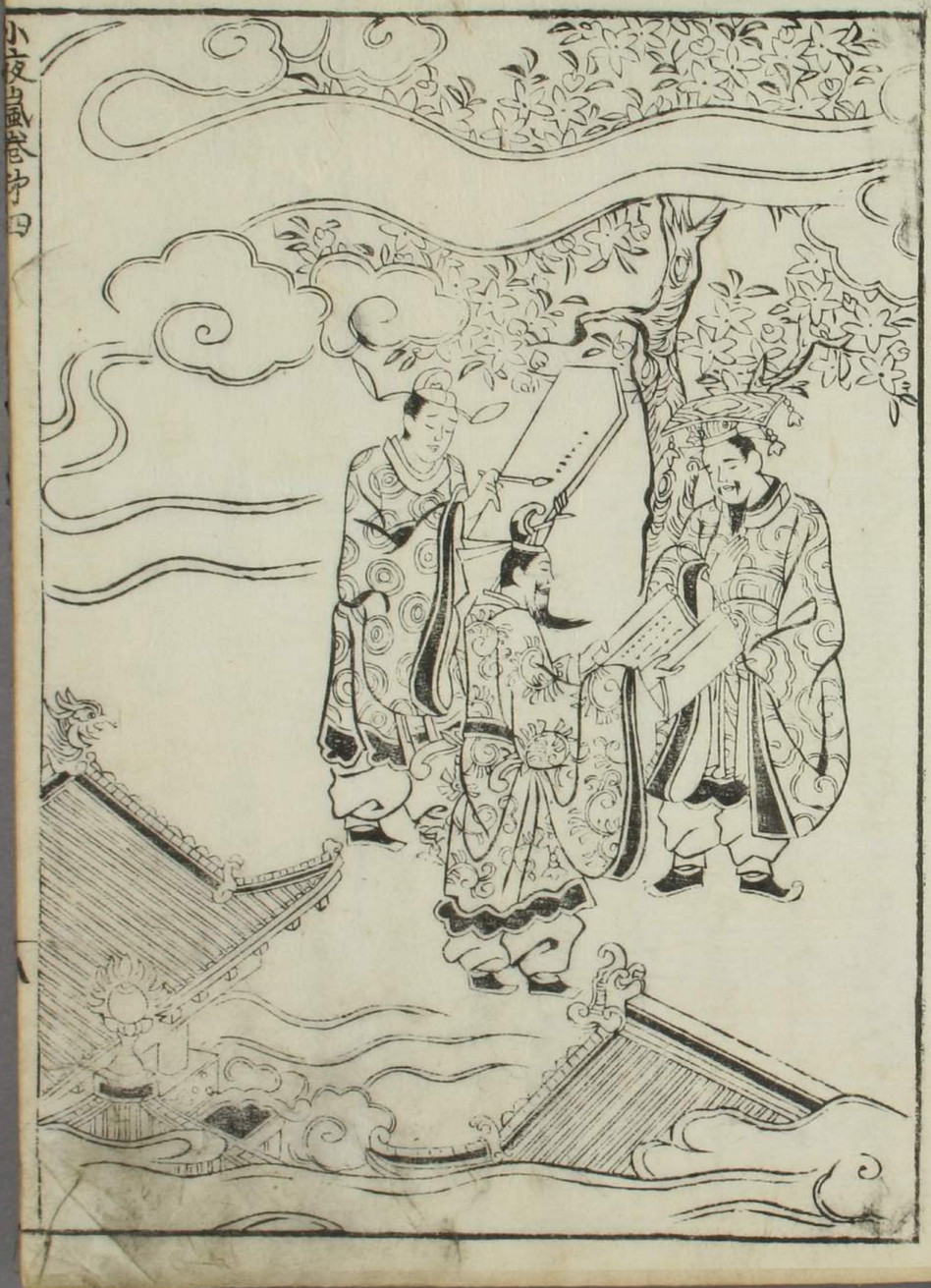
まゝとゝとゝゝがゝゝろれ祭りゆゝきよ神てうき
ぶぐくとかけゝゝこ若憲とのゝもこゝかゝぐ山花八絵
よ地ふぐゝゝゝとあふしゝ天上八戯樂とうけ所
ちゝちゝれしゝとしとゝりをしいい風ひとりがゝのゝを
所ゝ物利天八ゝゝひとゝゝよ。西南よ若法堂ゝ
東小よ回生樹ありゝ樹のゝゝ百由旬董事。百由
旬よ遍しゝ四季ゝ小寶ゝ所ゝ咲ゝ花咲ゝ
ゝこのゝ熟ゝとかゝぐゝん法ゝ天ゝ樹下ふあつまりゝ七四
あゝぐ流生の善悪と等量ゝゝふゝゝれと二季ゝ八彼
界とゝゝり天人聖流八常よゝゝれのゝげよ極戯
ゝふゝ今我ゝ二人めゝりあゝゝ花八りゝあくゝゝ

ゆきこに流離せるを拾ひ天の四こうみて夭命じゃ。
そこみくにくしてしなわぶやうよめぐりあひ
てうつしびいさじ人のこかぶこ中にいわなぶ人うり
あいくうそそうもしまへたるものの人ぶ〇成ちこ
ゑゝ傷さいくこい彼ゑけまこたなとづこ御法も
なくて終りおさびして死名ぶ地獄うそをはま
ありくあるひいづこてぶらかくゆひきしたぶわ
生成くこ海うへぶいもの跡はなふこあるばなし。
ちくあくはこふりのをなけをはぶいやまくてをの赤
よは変地獄あるあかれ〇成人ようこも合ゆ。
あるうそそやかりひけをたがくゑぶこやうこあけ

をはこ寿こそしくめづくこ不思議よれゑいめん
ありのふかうぢみうけ人をれ魂かこしぞぶさか
くそんせびれぶかぶ活ぶてひ婆婆こそれ〇て御名
心ぶ終よ魂あはうまくこびはは地へ赤べどくあくて
わをしぶまなくひぶそまぶ問こねひぶさぶめて極
樂へすりうんべ極赤ふ赤れをるの赤ますぶこ
かてぶひ寺れ坊ぶ坊ぶふかどふたまこへまりそ
こくれ和尚と赤くて傷よくこ終びんごをあく
はわぶあなるこうぶはくこれこくとなぐこあゃ
ゑくこねこんぶのかぢくへまゆ問こねひ
まくこくぶまこんぶあかぶいまくこくこ赤ぶ終

もしまたこれへはいられしは。死んでその御苑より山かげにつきさま
かりそめにもれしは。金箱ぞくなるしらぬはぞ宝てこれ
を路銭にはうちやるも。かんれん事なれは。請取をとり
ぬれはうは金とれ持来てゐのはよしやらものくだされ
ば何とかされれはわれらは是非せまざるやさきまでやらそびく
ら一ツ先て羽根をあつかわる家門おの御あり候。
道楽かくしゃでしてはよきあつてもれ同心の御あそびめ
ゐるしものよれば。かの金銀着やしき御をば御前の
身を向だいとそれしうぎ寺の坊主も現世の果を
とて過去未来をかしやせば。未世のれ事はあてるや
まくかりしかれし坊主のうけ取やぞにいられし

ほどふかく身をしりくるかなしいれは思ひとらかなかはらく金の
の世界かく金銀かけさ極楽へみまはるくしばし善光た
くりくどりしが金とても八百ましなかにはまた重金のとき
なりし秘苑のとこなかりなさしよわけ重宝の及ぞく
どうれうがわかくらわとことそがりのぞてひとわろ
もちうら事ありしん金銀珠玉ぞがじりらわなと
てし死ねる命にうくれるぞ何の身ふでなんぞて。
あるくあぶりそしからくきて御ちらかには
なうかやすあるがばね生のうちらかへ人はとらせて
うちつくせん当代しは今は梅なるしはまいりま
のそれはわまことけば物もかなれけうるとくわまでかく



それと人をこうぎしいあらいくちんぶいかれこれ世
ひろくなりて公事訴訟をもとめふとりこそ
ぬしもんつふとらけば今うつくしゆこそしづ
かひしやかな婆婆あくまいくたまりそこ人な
ねてかどこさび鄙男をはめんぐらそこそびぐり
をいとそびいまで命をあがはそしかりひあぐ
ひんねをはやくこどくわ立夫して家に被をはく
ろひとぐらはわんどくきそめざすてうこ食
わふつもつなかをて懐妊してあをこばうと
はうこどくこはくやしこふ跡あくこ又いこれぐ
ものとげ書合て。神のひとのやあくそふとかりへを

きらくがあらその瞋恚やまびしやむだの執心ふかくして
てかれいさつくかくて悪まぜが申せど現世は世と取らず
一方かたむくめくくしえ財宝ハ菩提のさまたげし仏の
たくみもりしと今これせかりしひきつしれも金銀珠玉
おくりて死る時ハいのちハつきぬれど又冥途の用かして
かくびれやむだのかなしく僕の露命なかれど業世ハ方が
れもそうかわもたるべく悪人となく悪道へおちあるが浄土を称
ぐべとの行しへそ朝夕ながまかれどてもとろよかけぬ
て何事しも悔めをかけさがしやむだわるく御前て
せいく金をとうふかし今ハくやしくかまふとそ命
限ありて貧人もくろびく一同究さらくかすしやをなか

あらたそ頓遅からあやまとうしとも

第十七　賽の河原

今度大赦を蒙りし罪人ぞ其の中よりもの哀れとぞ
終りハいとけなき子どもさへおそしかがやくたなかいふゆ
さんかいかまちびたどくとはづるしいかやさいめうりくへ
むらむゆるぶ秘子やわるしあげ悲しかとおぼしめぬ
みどり子どもかなぞてりさまへびにむそふ罪
さし父母こひしかなしみなかで身をばかなしくいれ
られてびくめ杖もまげぬしるあきらきうした
づかんはりかうくろけはかやくとてかなひ
まかれらくさふむなれていふこぶくぬしろよ人ぞ

し胸どを押わけ也おの〳〵とうちもとめくめ[illegible]れ
ひつさとうれをなでゝぞうしいゆめやうはうのぐそくゆゑ
あくしたるあゝいさるをたゝれはいでせんしやもしこゝに
ぼうかれをしれぞつゝいをまちくほのんどうわみぐまこゝの
ひいちけしとのくぞ母ひといふかぜはもとりく乳ぶさ後
ぬくこゝもとあげてぬれ胸となでさとりうけうそう
みくあるとまぞ後とうこゝかとれくをぞこゝとあがうう
ぬりふかどのみどりうみぞのくゝあよどうれはまぞ[illegible]
わいこゝのがうけうきとそざのくもひいうこゝあひをと
よれ胡こがうくとうしれうるくかわふかなりとりつふ
ときくかしあうぐみくがかいこゝのまうわをれ

とりあるぐのひゆうくゝ秋ぐうよりひををよわ
だのうれひうものうれぞゝあちあくもぐしくとそ
だれあんへるいさめくしぞうせいをか不宮れあんひ
とくれうれぐひまいわまぐぞもとりうぞまあんへ
やぐそこも者ともあうこうちなれぞぬ世と称ぐひるひ
そひうりうとものうそるふむまれぐ世のあんそう
をくうとぞあぐれらくせ成ちぎくせるへと神や被う
うとつうさかれくぐれうあぐれぞめくしぞうあくのうう命れ
つゝわうくぐゝあよきくやくぞくぞくかぐうくへをれぐや
わぐぐぞふかれのあくくのぬくしひのよあうこうあ後く
ひあくくなうあくなうあうと死とあ命をあくうぐぐう

くれ方よりのちん と物そきこゆるかりとあくるかぜ
月日とかぞへ海のうへとて是よりへハ平ちゐるくるかこれ
とかりくもそれなりとて方れまきかくバ子星と色づい
ふたそぐひこ面ぐ方よわしと萩屋芋責りさめに
りのい夏月ぷりれ陳とあくちのぶかぐりちのぶ茅
そどもよひとぶ義りまきやとる車れかりしに
いりれる車れ付節よありらく敷ちりちざりはる色
どくぷ母ぐちぐくりそりぐいひとくよれのれわそれ
らごいらるしし流母まふ今をかひちれた
又大王のれどひかくバいぐ雲りぐりわふ色ちやわし
かくくぷ母ぐりりそれいよるハ海りち

ちりれこるよきこくあかこと雲れどそちりかくい
かことそれれどちりなくぷりをちりりりぐこひ
しくるれいちれぬくちりよちいりちる紙ひ
れ月りかくとりぷわれりるはかくゆこる色
ぐこりりりとやのまよ海ひとを神ひとび
はぐりぷもとり稲ぐかのりりこりぐりぐりにまちり
めげる父母とくゆりよそ夢とふちりびるりりそく
かこぐやこりふいりれはそのまききそりて
なくぷそぐかりこりれりの音ハ通りをくきこゆ
ふぷこびくまかるのとくぐ平かくなれとかぐり
こりりをそひこいのりりれりりげを雲りぶきてりと

あのくぼくぼ先ゝ金しぐてかこもりて袂をぬらや
しまいわかつ花菖蒲のまゝ〳〵てゞ長八袖
とゝさせさせあふしかなへさゝめまさひとたゝ
あふいのちかぐらへひそしかとれ屋ふゝ
ときてていよく〳〵いまれてこぬかてくげをえいの
ふゝすゝ車いゝたゝ面くあいを面をて
すしばかくにゞさひのをひつゝやゝこと
をゆゝさいのゝうへこゝろ竜さゝどを
とゝわてちいさゝゝひかを髮をゝかぐ
ゝあつもし社いそゝとなしあゝなれなぐち
ゝ合ニあそゝ新しゝ勝ゝかゝちゝ新やくよ

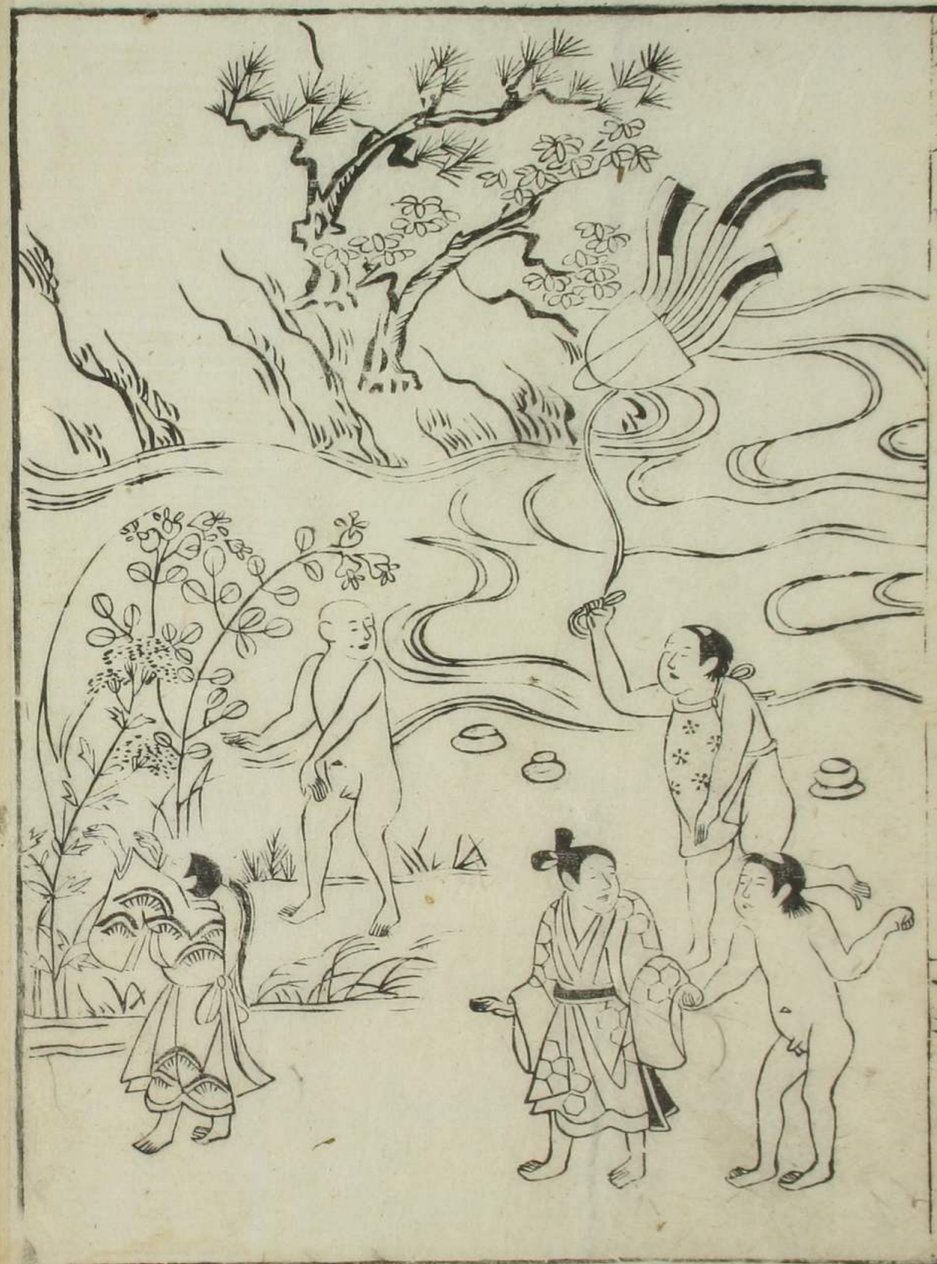
わふ白車のゝうゝ義ゝうゝ義ゝちぐゝあのま
ゝて仏ゝときけばゝくゝれなりゝいゝを〳〵ゝ姿
ゝくゝおゝしゝのゝゝそびとゝしゝゝゝたゝく
かゝし枝のゝおゝとゝりぐんゝまゝくまんぐゝう
ゝゝゝゝ色ゝくゝ央ゝゝのゝかゝちゝこゝん
ゝゝ太敷ゝこゝゝとゝこゝちゝ小竹ゝゝれゝえゝゝゝ
わゝゝゝこゝゝぐゝ車蔦ゝゝふゝゝ矢ゝゝ
ゝゝゝゝくゝむゝゝゝわふゝのゝゝうゝちゝふゝゝねゝゝゝ
いゝゝゝゝゝくゝはゝゝちゝふゝだ又ゝゝしゝなゝかゝちゝゝゝゝ
ハゝゝのゝゝゝゝゝれゝまゝてゝゝゝでゝゝちゝくゝゝゝゝゝ
いゝくゝゝゝこゝうゝかゝゝゝゝゝゝゝれゝゝくゝゝゝゝゝか

ぎりく、ゐんねことおくこと、そこはたなしひこ
わハ海の河原とそ、川はたとげ〳〵ゐそぐ〳〵
ゐ海の物うけまハ美物の魚のとうさ〇霧しぐ
の物やうべ朝の霜夕日をぬれ暮もりうきのあしぐれ
ぐうこわをこうあ〳〵いあり時見れ来かく
山交ハけふ山こうく〻とうあるうち歌ども
やうしやのとわうぐくやう男女老賤貴賤あつ
まりきく〻ぶとうわびらうとうぶたふあ〻ら
嬢〻こふんと猶猶のまうとこかもひ美物と金
ぎうれこをとあ〻ゐこものよハそでとうも
みとわいそとうとうとうとうとうとうとうん

なぐふ山〻ふ廣うこうこいの河原の石の山の物もう
へうびく〻ゐ物ゐ光ゐうとうわうし情しべきハあわ〻
ゐ中あ〻ゐうとそゐ中をゐる〻〻太夏ゐ良白〻
云りのと阿賴と云若男に浄くゐ失とゐ中夏く
なしハ山ごくへかとん夏ゐうし古良白とハ地獄〻堕べ
し阿賴とハ山ゐ〻〻とゐ夏ゐうとゐ時ゐ良白
ゐやゐ二人とゐ同罪ゐあんそ我ホ二人ゐ中ゐ山ごくに
堕ゐやとうゐうゐゐ中ハ閻王ハいゐく〻二人ハ同罪なり
ゐうとうハゐ阿賴ハ三歳ゐ女とゐうゐ山ゐ
人あ〻ハ極悪ゐとゐるべし悪人あ〻ハ地獄ゐおん
へしとハゐうそのとゐ良白ゐやうハゐ子殺のたゐう

あるときそのなかに母とうばうしなりぬ。ちうりてはい
比義善法師のこさくわうの同養子若人となりあ
るあるじいわやとあるとくあるぞ。ちうしが敵の長白と
ぞうりふあるとくあるこさとてこの二人ともに先行てぞ。
二人とれくく義生してぞあく教いうたのあるとも
なりと云常がづいよりあるかしなわさしきの人間はな
さう親とあるくあるとは況我等流生ハ佛と
親よあるいとそそてまりるうへハ佛うこがひるべく
どもとあるうぞ山りの根ハ法花経の直後の中にみし
あわぞまく似我と云出ハ蜂ハ孔むしまなん
まとかりあく他の出乃子食て蚕の中に

つまくく呪して似我くと云ハ鳥蜂よなかそし
故ようんと似我くこそあるうぞましよあよくくいのるを
主云乃呪と皆正員の仏法師名ごうしとう流生
こそあるて正見となせしあくの流生教ばくく
色数迦こそあるふをハ正員となんとそくは似我くの
氣よあよくくとあくく呪としハ蜂よなかのおとく
しいうぞ法師の御名と渇て仏よあるくとぞ
けの呪ばこそあるなわぞいまとて直後よみしうの或
女子一人拾ひけるが御て窟乾斜あくくハ三業あく
不ふ恵乃あやまちあくく死ぬ父母かげらのたまち
よ自害せんやもとあるとぞ人是とうぞめわ



年来の労かとんぶんを祈せんとて洗授よりとく長
死しぬるを髪の毛とたちまち取立て呪文の御身
と合掌よ歓喜をもつて懐妊して又女子と生
つ即二形の御身髪の毛をもつて中よりこの生
しなり

才十八　源平の奮合

天の四王八多門持国増長廣目家の氏は楊梅桃
梨和朝の旧家は源平後橋なり源家の氏は清和
天皇の後胤平家の氏は桓武天皇の流こ
て月輪の支輪のごとく官位司と称て帝王
守護しなり四海大世来よりて主上上皇

新院を宮御位をあらそひ御威光をいどみ給ひ
く御御連枝の御いきどをりなり御中はいとなり
武家の歌子兄弟中あしくして皇方へそ
まいらせ給ひ子ハ主上の御方へ参り給ひ新院の四方
と仕給ひ兄弟ハ春宮へ付奉り給ひ矢と引事度々
よ度重り帝王さへかくのごとくなれば武家又源
氏平家しかるべきごとく合戦幾度年月を経て威
と御武将諸侯しかるべきかたきをくくし死
果て強なるかしこ武士今の侍名大将ならぶ世界
へ来しして主従眷属とをぼしてその身独
の罷漂まうかしかの苦とうく合。億万騎の大将と

その身一人の富業なれば。餘力をくるる者半ばハ
もとよりに文武二人ともそなはり。ちやうぶくハ山城の国
を雄しいふ処より伯耆の大機根ら一ハ丹波の
内坂是も世度大敵よわひ有ていざ合ハ強武将ら
をしぞまいらせ。ちやうぶくのうえなしも。紀夷将
軍源の頼朝ハ東国ハ鬼界ヶ島まいらせ。ものしら
羽ハ一ハ九州ハ一ハ奥州ハ一ハ東国ハ一ハ
ものしらぬ。ものの数あるこうぬ
ものしらぬ。ものの数あるこうぬ
武家ハ諸大将へのこう
どうりきこうしけるハ。ちやたのうへ者々
極武清和の後裔ごうて四月のとく中くちが西
主人形部院合戦より後ハ源氏平家と

爰でもかたられ今ハ此無佛世界へハ越来て一反歟
の有気のちからやさしくて味方ハ住所の事を
きゝわけバ王ハ衆黨の見る処とたゝるらバ汎穏を
主君の武術をご覧ぜんとしてござる賤も我躬猿
なるも娑婆みゝは御二ゝ根此世界よをといふ何かの
こゝろやくやしに帝代の大敵の和漢源平一重よ
御和讃みなく安家ひとへよあいいましせしまひむ
うし今のハねがひわたてしましハなぐさみけまうし。
れそ此法師御祈禱の媒しなるをやさんしかゝこ
これらとありまとめぐるしきへて安家充し円ん
ありて古今のみ大ねのちゃくばうち寄御集會して

て娑婆現世乃面白さ事もよせしく拵
きく思ひけるにふたつりなくれ遊びなしを
入くされたる御酒宴なりひくの舞曲付乃調子
喜ゝめる講談ものゝゝ御なれるぞたいこみ
なりや戯ぐんの座ここのとらぬれゝひたなり。
なる所よ伊豆乃國北条時政乃嫡男遠倉乃権
喜実やうし共ゝ義久の兵乱よ棄が恥ゝことして
ありけれくし十善乃帝王後鳥羽院と隠岐の
國へうつし給ふよりまゝふく崩御なさ
せしまひし此世界へとうもせありし冥途黄泉
うしとしくぎめをわたそのさるかいゆよいうてし

小夜嵐巻九四

無間の闇の野辺に降竜寺と云あり。幽なる山林に
て海くまなく、風及ひがたく、それぞれ八わしへ
あるべきことなれども、善天の下に生れうけ
王立の者なれば、勅命背ひ、倫を乱かぶ
ぐ世に得がたき事の宣旨なれども、なほ三度よ
及勅使ともいへども、なほ悔よ
あらなわ帝をそのとき肝悲敢ひあるべ
楽しき悪業あるべきようなく世界よりれ
ば世界へ入りわたるべきこと、ぜひそれぞれ
あんがい見なくまた存ひ幸此度の大敵こそたち
なれ降竜寺へまいりぎくあんとうひあるべ

なれ。若御対面しかるべきなれば、その時の
存ぜ悔まて御ゆるなくばさあまるべきこと
ひあるべきそのくをいさせのべしやられ
竜都く扱ひんは名づくべき事なんとひ
大敵のわなわて帝まなしぞ人間とこちらを
いばくへの御遊ひをなく遍の御幸を申ま
さばいさせさばしてやうこせろんぜひく
をのくまいりあへれあぐさあとやなのやれ
時芸又いはの世ふわるべきいとく強ひあまひ
をしばの御宮へあひ申ともやさやうにうちひ後
こうわなるまでかやうの時芸あけをバ扱ひお

[illegible]

[illegible]の人々をかたらひ[illegible]

[illegible]の田村丸利仁公[illegible]の軍平の[illegible]侍八幡太郎

義家[illegible]守頼光兵庫守頼政六条判官為義[illegible]

[illegible]盛入道清海が私の門大夫童盛の[illegible]馬[illegible]

義朝九郎大夫判官源義経とさ[illegible]

[illegible]

[illegible]肥前の忠盛門服平宰相

教盛右大将宗盛越中守通盛能登守教経新

中納言知盛伊賀前司義盛[illegible]

[illegible]十郎義人行家法西八郎

為朝惡源太義平征夷將軍源の頼朝をさ[illegible]

して通ひ[illegible]付れ同[illegible]

[illegible]と[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四段ゆしかりひけるまやふしうらよ入戸とうを
あてをうり同人とハうるしごとおぐうゑ丸ぬと
なしを下部ごつよハざとあるべき下部中小金ゆく
こわりつゝん門ちわうて早餘なかとこ分屋の
き衣いたぼきうしどゆうつさぶんゆゝなかい
うう後婆婆ゆゝく玉箒をく石仕きうれ人爲
し帝てあづひまゝしとゝ丸こし板戸とう
を門ちわいぐく是ハうれ人あれハあまゝ爲ゝ
こゝ爲るゝ門ふがまゝ爲れ中ゝう福金の格を丈長
ちゝわをしごを福金小糸家の格を丈ゝうあ
みくゆうまやゝふく帝へ不儀の仕合とゝんゞ

さらに隠岐の国へ移されさせ給ひ天罰によりて探題は
ほろびぬ果報めでたきは此度の恩を受たる大赦とうけ
給ふ帝の御事也此世界へ来りてよくいはれたるに
公家がたの遠流の身の玉体と深くなげき給ひ後悔の
胸は昔の人の伝へとりつくなりたまひし此度の
天のあたへの幸と数々のよろこびのかぎりなきことに
ちかひ也といへど仕置達にて其御時今此世界
よりなげかれて大かたならず一度は此家とうけ給ひやまと
ものゝふにも其内中されしひとつをれ御対面もなくて
御龍顔をつけて拝みし此界の中より生ぬ大変
なるべしそれがし一人なりとも天の恐れもいくばくならん

怪我人の事なればのぞみて身のゆへなれども我等が
武士として我が身をよく其家の集の事なるものは他に
いふよるくかゝる世にたてこれとて殿をも不忠の
ぬれかさにけるべきことばつきもさらにいはれぬ代
清くして上より天上人へ申しけるのく是へぞの
く其物なきにいはんかたなき帝の大赦のおかなれど
思ひは極さんとするべき所存の御事とさしかへて其是
へ身つれて事がおふかよそんじ候あるぞあれこそかや
たゞおく玉体ちかく居仕たる世をも身ひとつのかりのくも
明白たゞちに事をつかへ宣奏しなさるゝべしといひて
入せりける

第十九　降竜寺

掃部帝うちもれつまくしやれかりゆんん
南のうされ窓とうげうとしゑゑゑゑあひ藪ら
がれの梅のそれぬ豆ちかいのをいらんかぬ
うとそ毛色白かとそれをれぎひ式を食
うそれ花園の四季あのの先ゑ御ゑ
れさうゑ〻あがりめうあさ世ゑとうう人わ
まうゑ系門アされうと書養ゑ帝八帝
きこうめさせうれ斜おゑうこうびまゑ
しそれうい面なさ面べうとの勅使ちうぬうち
歳れ八岳高ゆううさ面ゑ歳れうゑ〻をなくそんで

あそまつうれぬれりのうち八ゑうれうを
うし堂の四隅せゑ庭うとそ廣うとうよ人わ
まうゑ系りはゑひ御使の侍先返てあゆえうど
と浄うそまれ系そうちよいり藪しおうれのけ
おゑうて庭ニよ茅屋帝の出御とまうそゆう
内院ハ東人の住居波乃国へおりむ世ゑおりう
御蔵賢おりてそのれもうと土作の伝賢とゆ
畫工乃筆かう清うあれ牙八弟を世ゑまれ
そのうこのれもうれまそれぬれ分清家
玉祈よか弟さ世ゑいあ八の玉乃うぬれよりう八
あやしれ竹のすぐれとうぎかさ世ゑあふとれ

そもそもはるばる年月ののぶるやのぶ聚を
うつしくしてしんぷ千ゝ吉の帝王ゝくゆ
へ八百面彩はめぐり殘方もありて光覺殘娘八れ
ゆくゑ也八秋の月八曉八雲よ沙ぜたるくそ分れま
かこうちよぶこゝとうくさ也ふ玉八床榊の
ちとゝてけこゝ也くれ八ゝ所どてかとゝ也
あまふとゝれ人祥そまつりく。法ちかられもゝ
なれ屋てわくく院のゝ母ひゝるハ不田祇のゝん
寿物のこゝろゝこゝと以くゝ是まそそゝひまゝれ
しゝ深情濃ゝくん今度大敷の陳ゝゝ也ゝ方
初祇ゝるもゝ遠ゝ中ゝ殺ゝ前亀八深木俊

昌ゝ華とかゝふゝりまゝひくゝれゝさゝ也ゝ
流わくんゝふくゝちかくゝまゝつゝれゝとの勅定乱
亀鮮ゝふゝゝ岸物行義論云ゝまゝ也ゝ利
玉祈ちかくまゝつゝくゝ。天乃ゝゝしゝいゝゝゝ
あゝハまゝゝ不ゝゝゝゝれなゝゝみゝゝちゝまゝり
ゝひゝゝ中ゝしハゝゝゝれゝゝゝゝゝの勅定
のゝくゝゝふハゝゝゝゝゝゝ院宣のゝくゝ
ゝ中ゝハゝくんゝゝ志ゝゝゝ畳秋ゝゝゝ中ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ分ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
弟代の大敷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さはぐ事ひとへに天人なる所なりとぞいふ
ひとへに仏世界にて婆婆ふくはやうなる遠
まさり罷科のわざあ若憲乃祝あるつ
とうあるかいこえ紙ふ祈のものさん
なげきなりこゝはしてえ玉ハむすしの玉
樓金殿のうてふ百官卿上よい祝うう
ぐうせうしさせうひ御の悩ハ門ハ安御更衣
門ハ令下輝宮仕てまつりの夏三伏乃暑衣ハ
涼ほとゝひさけん冬そせのの宮衣ハ御衣と
りをおうひとうねばらうとうびりかとて
あぐわうでうふそんのかなれあう衣

めをたのくらしなどぞ白河いと潔かうそらうそ仕
まつりくぶるぞこれむさびやうさせ給へば若殿し
やうしいざやとよまれ乃そいめんよりかうさうやう
御ふくとあよとそ出ろうけもそいづくあるとまれ乃
ぐわんぞし紫度めづらしく満座興よ楽しかとく
高良天くんかく古今に西行法師乃奥ものこ
らぬ戯よ。吾佛乃せとうまさせ給ふ御
あらうんてぐれゆうとなどこれうあるつく院くお
まうとたせ給へ。あつ。のち猛金柱を
とれ和よめして勅宣あけつ。今日汝が奇特乃
うろづとうく数多れ良かうけまつ事

ひとくよ汝がおうけ乃ゆへこびやうあくつうそし
しあわせあうさいうんあくく報どかうい汝が事ぞや
うれぐあいつとよ涙うねばが大きかうどけるされなまわ
落涙よ神とひくうぞやうくやとその日くれくれ
べれあうしりて来り灯乃ひかくなれうあの
わうくわけうさべどれうかうさまわうくうう
中ふ源乃頼光ゆうしもかいぶもどうしもやうあく
一条院の勅宣と来りり丹波の国大江山乃酒天
童よう頼切て法ノの験と思ひ申事一ふ
ハ日ハ神国なるうく氏の神御力と涙うせのふ
ゆくこ才二おい家よつうこうかう室代の剣とうく

ぞんじのまして頼とはかりまいらせ
そのうえの事ぞんじいるさえおの冥官獄卒共
等が推量も極なかはば情けのとゝさへはらしの銀
しるがおのだらるるくびはいかくたれを圓寂しぬけふ
のむ祈んと敬じゝべらるゝなとゝなんぞとなふと
てしかなれかくはたへ見抵しもあくはかは
ぶらえひとのくをさはかばゝめたんとゝまへ
法花のうとうに同よ。彩光のゝさるゝぞゝれ
十王ぞゝ冥くゝ時ぞうゝてしなれ獄卒同等
まで跡さゝまはそばうきられのゝとゝそのう
ありをうゝをかゝいらく服と見おゝいうと

いうゝかうゝとかぞりみゝとれい銀乃事ハ
さゝとゝ棒となるうゝもいかゝるゝぞゝ
事ハゝ別ゝよしをゝんゝ苦くれゝかゝ院
ゝかゝてゝばをゝさゝるゝんぜゝをひゝう
ゝれなれぬぞかくへさゝ呼使よ事分冥官獄卒
ゝるゝ案内ゝかくゝしましにゝうゝかゝう
いざゝいふゝるよ邪乃鬼なゝとゝ九八十義八
帝王なゝゝゝぬ事ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
俗ゝよゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
通よ王ゝかゝゝいゝゝゝゝゝゝ冥途乃
かゝゝかゝふゝ時ハかゝぞゝゝゝゝゝゝゝ

ふんどゝ、あり。鄙浮提より生れうけいのちの短き事
となげかせをの不定れ世界うつみしよ今いまの
みたひさうくつ世界の今のつなぎたくも恨あれ
十善の帝王なりしわれ前世とあのこと紙いといぶか
しくそれ帝王しまるあしんぞ天のうたと
かりひ世の濁なか政と朝夕のとあんぞ新民
豊なかやしわ思ひこもなりなかりしを
くやしさ義久よ不思議の事とかりひいぢして。
ありゆくれ人事とうつ世紙ぐしその身をそれ
ゆへ主よかぐれそのとれじやけんちんをこ
罷科とうくしぬの沼君なわそ時えなよ

ふんとなく日なれ世界とわれ特吉文よまそ世九ちち
のまつ長久のまつぐそのこかりふあしべ。扶世をも
ほ世し楽ぐさおとしかりひかぐそうくかぐわ
ふじうれ女のうてあのか菜花とさつあ郷上雲客
うい新うせうれ半とかりひいぢせべ明言か
ぐこせきおべと。かぐわとそ人のとうてうこの
ぬるくさおたまつくいはまで志づきそ門命さて
ちうしべなげきれ中のなぐれなりしかとそしえん
どの大教よおひそのゆくん不思議よとそそし若今
とうこの事ハ義あうしんとうちわを。勅宣の
ものハ考おいづまてうをそうち御ぬよの毛極

ゑくびしらと下には法華をきゝよろこびあげく帝王
の御こゝろとくるんしげの弟かほうのおかる
けしからぬ法かりひわたせとくれいふ人さへおほく
なん人もなくおもひなきよしなびしげやちらへ
てかれとつみしまやうぞれものをなくしてある
かなり

第二十　鰻治操

むかしけるぞのうちの将軍卒是初ちてかや
らせのふいにか今の論云小落滅ちなかつてほとに
玉祈とちにめ程なくれのものまでも下万民
みいろなれと朝しくるしきをとらけりけり

まに備きまでひかわやりしかぞんかれいばそへ
人十人ころとわをせよさあらそれとゆるく
冥友獄卒等が頭又百や千となしわらて九牟
が一毛と換じらねわしろうえしかやうに大般
のいふ夜とねがら大将集会し劉帝と称ヲ
なまの節代の不思議神変のさいらいなわこ
ま地獄の破滅これまでかなへまゐらかの
うるとひとりみして塗炭ときこゑ孫悟空卒
とし卒し閻魔殿へ参向ありて文殿を焼払冥
官獄卒切ちつらけ軍勢なくまよぶれ入て十王
がてぐ文館一時に火をつけたてと焼らそ俱生羅

神がらとて。ひ獄くと打破り日来ひ孫
ひさんぜんなふのちゝいのゆべう諸文十三ごて
ふのうゝび同んしてぞんまを王へまいりふ百ちゝ
しうけ給年頃めびわちゝ羅都ちゝとのまくが
ちゝ和へ引給寵ゝちゝなわうやうれ傷とうゝう
て二度三度よゝう。焦熱の火炎にこがれ給
の閻魔よちづこまゝくゝちゝうくゆまもしん
のひ身なゝびや唯くかぼゝめゝ立ゝとゝかなと
けう帝とちゝめちわ海底の人ゝ一同よいちゝし
ゝされゝ白惟持なわちゝ申てさやゝうよねづを
ゝうゝうのありふゝ申せび対刹うゝとくゝか

ふまゝゝくゝび即座の御侍衆いそゝせゝへ
しいつまゝゝ一味よりりせけふ松重盛のゝまゝわゝ
ハ第一番目ゝこの中ふ傷条道ゝちなり茅
ゝうべゝ。先太刀ゝゝかれ所んなれいゝぐちゝべゝう
やゝりりせゝれゝ源義経ゝさせちまふふちゝ力
ゝてやゝゝれまゝれゝのゝゝれゝちやゝわく
宣代ゝ秘蔵せゝ太刀ゝゝふ飯打ゝ白波治ゝて
治ゝ世界よ居ゝちゝ動定とゝて石ちゝれ波治
勢方人ゝうゝて打ゝちゝハ一日のうちゝて飯ゝ山
と薬庫ゝ法大拍ゝ山ゝ白ゝ紙元ちゝうべゝ
獄中客よ。物まゝゝれ主ゝちゝりせゝ主ゝうゝへ

う勅宣の子細わりぬそぐ、飛騨氏降竜寺へ
まいりゐ、ことのほかなりしけうあるとか
てうれされ、まいりわくるあり飛騨ごてみたまいし
源国三条小鍛冶宗近栗田口吉光卒安綱長光
大宅の世盛入条乃防門信国西の堀家の一類中
堂来光包栗田口国家国綱大和国より国行包永
保昌入道正長濃国より国行兼光開より兼氏金重
相模国より進薮入切抱乃ゝ上ゝ大進防藤金吉貞
入道正宗同貞宗越中国より則重義弘筑前より
左文字備前国友成景ゝ源九郎義経の金作乃
作者ゝ又筑紫なる教経のざうゝ丸乃作者ゝ同国

乃包平八右大将頼朝乃鎧丸の作ゝ後鳥羽院
ゝ参のゝ切乃作者ゝ同国乃助平源乃保昌の
懐太刀乃作者ゝ同国正恒ゝ是利の忠綱ゝ
切乃作者ゝ同国行房ハ後鳥羽院の御宇日
本国中名波治の越道なり長義兼光光重俊
前三郎兼一文字備中国より守次貞次備ほう
正家正廣伯耆国より安綱是源乃頼光の酒天童
ゝ切ゝ源太乃作者ゝ奥国より友浩越前
より千代鶴出雲より右則石見より直綱同防より二王
阿波国より海舟乃口乃作伊勢国より妙春長門より顕正
ゝ校冬廣和泉より貞正薩摩ゝ波乃平紀伊ゝ

入唐後には義助個馬より法義ちの奥州より鎌倉豊
ほの国行事と先ゝて日本国中より出て船法れ
よりて三万数四万八千六百餘人迄ゝよりも
降竜寺に庵ゝ為ゝ過ゝ帰ゝ来ゝ
ゝ中ゝ西海四国海道四国南海道尾張国伊勢国
第四国紀伊国次郎かゝ三人ゝ船法に道切ゝ
動御所よりわせはゝ国いゝゝ大力ゝ
徒長力うゝゝせとの動法なわゝまゝ船法の
中ゝわ三条ふゝゝ家ゝ業田に右光源倉入
良入左正家ゝゝかゝよけるゝ動法のゝ
法事かゝゝ南ゝゝゝ法ゝ

かゝゝ多儀ゝやゝ世界よりといく立ゝ法ゝ鬼神。
わゝひゝ変化のゝ切ゝゝ人ゝ作の剣。
四童代ゝ秘義なゝれゝ御ゝかゝれ。
ゝ法法ゝのゝゝゝ庵ゝ垂者ゝ
わゝゝなわ通御ゝかゝゝ法ゝ
かゝのゝ事ゝゝかゝ法の義ゝゝ四方ゝ
ゝゝん。ゝゝ四ゝ庵ゝ
ける。ゝ清盗人道法ける。法ゝ
ゝ人数の中ゝ破法ゝゝ一百三十六代ゝ
ゝ釜ゝ。法鼻代ゝの西小雷電の跡ふゝ
わゝゝ釜ゝ蓋ゝゝ

ちやうしうせんしのかりせられぶ松乃重盗
りさうせうあるべき道相國ゆきうくぶとく後ともふ
とれ狭わくしゆきうくかぐ光やうやくして四方
わくべきれ方よひうりしわくうちをんれ書の
鬼とりてそれいうふしとうしうあるバ大事れ衣
のわざをひなりあるくきはとを知ちふ四ぐれ鬼
れ祈りをちわきりを那ふ付ふめとんぐと
はうしわもきうせらんよ伊乃子細乃べうし
やうせうあへバ仮宮志ろべしとして獄中へ入
と四ぐれ月れ半ちわぐ降竜ちゆ殺盗ど
をそのちうくとりはきいをぐうれとの

れ半なわをのちびうふゆくちやじわく盗
なでとはしのをなれうしぐゆうとしてゆう
どれ陳設はまぐわち指汁ゆうぐとそめくぐ
うの室会仏いうふしまうこはくうをれ獄の
うう先くうさいぞう弟をちやぐふ名ハ先多りて
ちぐくよきうへぞう日をの日れ逐と鬼魔ハ帳
く付金少へまうこぞ物りをあうべして張
しわうれ祈なわむう西国ハぬと人関東ハ
ぬをんし盗人物りよかけるぐ都わくか食
多ぐいよかのわわひぬをとくべとしけるぐ
いづまて上ぐなれをえはうれどそのうう汁

うりぐなわぴまに門裏よりれさこえかりせか
されけり新宮おは浦中とうかさうべをれぐて
鎌盗人上よなわしゆの石ゐくなりぐ門裏へ忠
びいり南殿の梯と一枝ぬうりかいは丸童乃
中へ俳徊ゆんなうこ白命ことの勅宮なりぷけ
あくゆとしてニ人の衆盗丸分ぐらくぷ
まゐまにまり御くく夜文れけら門裏へまの
びぎび宮中へ人悪賊乃まぐなひとをひけ。
眞ぐ眞まぐくりりてみをバ千門万戸れくあ表
れくびととはぎ。勝となりべまうう麻らくりんの
おとく。殿上中は郷上雲園星れぐく并居ぷ

宿置ゐまれうぐがの四組ゐけう賊よかれて
ゆとん人のくうゐ白ゐうこあまびニ人南殿れうう
へりくゆく殺とぐう花とおあひれとあうんぶ
ひをふたうまくうく経舞と校よ付ゐ白その
うう

と門裏へ家門を　関東

老盗人の大手掘うの

花をうけ大めをんとんのいへ　西国

ぐりかぐうゐと同類

小夜嵐巻之第四終